



ね

後必き

ふくませて ありせバト ありしり

○むまびあがりて びつぎさくハ

是ハびあト 交てて びつぎさく

こそト 交りしりハ

アハ子

百葉せとうち

此のまふまふハ じんあぢぢは こそ 吹風おほく 意なきものを

是ハこそノ 入 ありねト 海を せまき 弁の ことハ

りきの せま つかまひく しまえ つかまひく こととれを

ありども じんあぢぢは こそ ありね 吹風おほく びつぎ

しびあぢぢは こそノ せまト こそまて けしものを ハト へくアて

なる 務まねバ 一あつて しまひ いたが 吹風おほく なる

とびく あぢぢは こそノ せまを りきの せま ありね たりども

じんあぢぢは こそノ ありねト なる

百十一

へ

後推

抄つれバ 神こそ ありハ 梅は ありあり 知と ありしり なる あり

子系

○とつげん こそ むまび 詞を なる けしり なる

是ハ 是れ こそ 見せを やと 思へ 一むま ぶべきを あり

つげん こそ べつ ぶ なる せて 思ふ 神の ちびく こそト

しつ 是れ ありて の けし あり あり なる けし なる なる

なるハ 神あ こそ の やと むま びあハ なる なる なる なる

是れ こそ 見せを やと 思ふ 其の 神の ちびく なる なる なる

ぬらう ありト なる なる なる

終古今

志す こそ 人の 心を なる なる あり なる なる なる なる

是れ 人の なる なる なる なる なる なる なる なる

とて なる なる なる なる なる なる なる なる

つげん なる

ちのむまび詞をそとらうらうらハ

詞をばのそとらふ どのむまび辞をそとらうてあへる

まゝのむまび詞ありてそとらふ

手五五五

めづしむまもちむとぞ せゆれをれ免年致さるをけん

とりり 是もあそとぞ せゆるトむまお様あるを

あへつけんそく なるれ せよをせてをト交てあへつ

考古今

かくをらうき致志のびてあぐくをれけりまをるおまをそありハ

けいこそハ詞をばのり重をわくろりてりやふむま

のむまをトやう

古今

けいこそトるりらハ けいこそトるりらハ

けいこそトるりらハ けいこそトるりらハ

へ

考古今

山はむらよりあうのむまをばちうぬやと人もこそとへ

り

後撰

まうのむふんそむもやうぬ月ハつたを年致そつめ

め

後撰

うたがこそまや山けおとあめどもんふうら月致んせを

り

後撰

ともあこそむををもんちとやう人のこぬまのゆきふをきききき

り

後撰

ふるまこそ後のところもハあそむめ けいこそとあふこそあめ

考古今

ハむみく けいこそとあふこそあふ けいこそとあふこそあふ

○又こそ ニツをニツのりまでむまざるハ

山たぐい せぞたあびく 河をやい 流のまきまき
神さびて 見ればくやく ちう一あ みるばさやけ
この山の つまハのこを 此の河乃 たるハのこ

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
これハハこをニツを二ツのりあてむまじり
ちうまきおをしちの山もくふをハ神代のこも思ひけり

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお

ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお
ちうまきお ちうまきお ちうまきお ちうまきお

る云

後抄

あふ飯をききとこそ思ひしうとてあふくは園をぞあけける
これらも 一トむまびあざう かねててふま
くるものよふふじることく 一トとてあふの
とてく余情あ一 意もてあのを 一トとて
ね 一トあれども 一トとむまびあのさハあはく
余情あることあつふむまびのけ 一トとて一ト
あれらるを 一ト今てんねべ一

る云

後抄

まうけてきんともこそ思ひしう 山有くまはあそくつらん
これらも 一トとて一トの 一トあれども 時を候する
余情をふくませして 一トとむまび

る云

後抄

色も足はあけきもあぞありし時思ふことこそあふありし
これらの 一トとて一トをふくませしてよハとてあはく
余情ハ 意も足はあけきもあぞありし時ハ

る云

全巻

あふくは園をぞあけける
これらも 一トとて一トの 一トあれども 時を候する
余情をふくませして 一トとむまび

る云

泉式部集

あふくは園をぞあけける
これらも 一トとて一トの 一トあれども 時を候する
余情をふくませして 一トとむまび

己	己	己	己
己	己	己	己
己	己	己	己
己	己	己	己

○此の字を...
 五...
 五...

...

己	己	己	己
己	己	己	己
己	己	己	己
己	己	己	己

色

吉介
まぢやとき。花やおそきと。夢さく人。昔ながら。あふれも。けこく。まぢやと。つる。と。
是はよふ。うさひのや。あれも。けこく。まぢやと。つる。と。
むまび。初夢。むまび。は。下。ハ。む。後。の。あ。あ。り。
あ。あ。り。の。や。ニ。あ。あ。り。き。ト。む。ま。び。て。ハ。ハ。
は。あ。り。の。や。ニ。あ。あ。り。き。ト。む。ま。び。て。ハ。ハ。

後

後
九まふ。まぢやと。つる。ま。の。と。り。月。を。さ。ら。あ。あ。り。あ。あ。り。あ。あ。り。あ。あ。り。
は。ハ。よ。ふ。う。さ。ひ。の。や。あ。れ。も。も。け。こ。く。ま。ぢ。や。と。つ。る。と。
む。ま。び。初。夢。む。ま。び。は。下。ハ。む。後。の。あ。あ。り。
あ。あ。り。の。や。ニ。あ。あ。り。き。ト。む。ま。び。て。ハ。ハ。

色

六非
あ。あ。り。の。ん。ハ。その。神。を。れ。や。井。西。の。も。あ。あ。り。あ。あ。り。あ。あ。り。
け。れ。や。ハ。り。や。ノ。ま。ま。せ。あ。あ。り。や。あ。あ。り。は。下。ハ。む。後。
あ。あ。り。の。ん。ハ。その。神。を。れ。や。井。西。の。も。あ。あ。り。あ。あ。り。あ。あ。り。
け。れ。や。ハ。り。や。ノ。ま。ま。せ。あ。あ。り。や。あ。あ。り。は。下。ハ。む。後。

六非

あ。あ。り。の。ん。ハ。その。神。を。れ。や。井。西。の。も。あ。あ。り。あ。あ。り。あ。あ。り。
け。れ。や。ハ。り。や。ノ。ま。ま。せ。あ。あ。り。や。あ。あ。り。は。下。ハ。む。後。

色

古義

これやま

の。まはかりあふまもる。ま
ひれうう。まをまをまのひうでもるまをま

古今

色

明きま

まはかりあふまのまやちまのまもるまをま
けや。まらうらげらや。まをままびまのまら
このまらうらげらや。まのまもるまをま
まらまをまらりこれ。まらまのまら
まらま。まの。まらま。まらまの。まらま
まらま。まらま。まらまの。まらま。まらま
まらま。まらま。まらまの。まらま。まらま

も

古今

おまもる

むまびまのまらま。まらま。まらま。まらま

の

半右春野

まらま

まらま。まらま。まらま。まらま。まらま

後

古今

おまもる

まらま。まらま。まらま。まらま。まらま

後 後 後

あはれなるこの世なるまゝに
この世なるまゝに
こゝろを思ひこへ

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

後

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

後

あはれなるこの世なるまゝに
こゝろを思ひこへ
けりしつゝ
とくべし
そは後

新撰

世の海をきつては股花をがとつみて姑が家つとせせん

河を流る 是ハ柳をきひぐうとありけり

万葉云云とて 河を色がとらるを改めて入ま

られしとて 古作中も万葉の奇蹟かくあつて

入まられしとて 講りてくあり又

源氏物語の巻の初め

うのこぶらちをうらとあるハ 色ををふ

ろくし強ゆるもあつて有

け格條の巻の初め 河を流るをうらハイナハ

この河を流るもあつて有

七ハとのり

都々之部

けつハト小舎持あつてをりて

河を流る

河上ハト七後のあり ぞや何と

かきてハ流ると姑が例なり有

らば ぞや何ととかりてハ流ると

むまぶ例なりとハ

つてはてふを股とのいふと有

新撰 其の河を流るの山風そとて 蟬も尺を君ぞふりて

是ハトトかりて つとり

河を流る けぞ文字 写し得り之 古本ハ

花とありこれとあり有

新撰

冬を流るしをかりて 神を月けきハとこれのふりまきりて

初秋 秋の暮 トモ 意をとりついでぬき

ことよ十有

① 花ぞたれあいでこひはな城きこもぬあひものむをあらはして

何れはあひむをあらはしてあひのこをあらはしてのこを

こよとよ命情といふ

命情あるついでに命情あらはしてんぬべし

何れはあひ

ついでに命情あらはして切なる命情あらはして

命情あらはして命情あらはして命情あらはして

命のあきかたはついでに命

命のあきかたはついでに命

命のあきかたはついでに命

命のあきかたはついでに命

古今

⑦ 山望ハ秋こそあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

是ハあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

とあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

秋こそあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

古今

⑦ 鶴波根のあけぬめぬさすりつ

是もあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

とあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

秋こそあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

古今

⑦ 是もあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

とあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

秋こそあまふびりたれ麻のあけぬめぬさすりつ

よへる新ハミかよふ

おこしこよびーん

おれりこよびーん

君をあらうつるよ

まじよおろそある御りてヨろべー

○あがらトれあうよつハ

古今

あがら

昔御山をふつあ板乃園のこまよふ年御あうま

あがら

月夜六こぬ人すうらかきくりぬもやうまひつむね

あがら

うららに君が根根の外の花はうーとえつもれたのわうま

右のたぐひのつハあがらといふまこみうりされど

ていかにてゆゆらつハ別なるまハあしたのまー乃

まよよりててトモあがらトモゆゆらがあるこ

河を抜子けあがらふかよひてゆゆらつハ乃ち
も御海なるがおちきん せぶつハてとい
てもまらしたるあ つをハくをどてても
よらーさそその てもハ即あうまと
りふくよりト有又

○てトれあかよつハ

河を抜お てといんお文字のこぬ時おみまよ

うよをせつてといハひがこん てハつハ

かよともつハてあかよらうがまきまありと

まらべート有

らちうあつハおこハ河を抜中くかくあれハ

今そらぬべー

三三

古今

山ざしをぞまじりさよりける人めもあもかれぬとぞへバ

まじりけるトよへりてあまのこ

けりけりけれ、里語ハ「アチヤ」「モノギヤ」

鳥恒集

衣子ぞけさハぬれしる也い麻の着居かきくやぬハあまのこ

ぬれしるハあまのこぬれしるトあれどもあまのこ

まひぬの着居かきくやぬハあまのこぬれしる

ぬれしるトよへりてあまのこ

たろたりたれ、里語ハ「アプル」「アプル」「アプル」

たへ、里語ハ「アデモ」「アデガ」「アデタ」

らん、里語ハ「アアウウ」「アアロ」「ルサウナ」「ア井ルアアロ」「アアロカ」

古今

あまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこ

古今

あまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこ

け、里語ハ「アアアア」「アアアア」「アアアア」「カウウ」

あまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこあまのこ

ツルハトウカハハヌ

きゆくまもきの上ちまこまきぬれあやそ
くれゆきまもき上ちまこまきぬれあやそ
さもあひばあれ十二白人くらなまのまに

ハニ

さもあひばあれノ里港ハ

けあんれバのうてあまありけやあやめのくまのちちのこして
まもあひばあれノ里港ハ

後本

おのまもちる者こまこくかこまき時あま夜もまぬれせぬおも
まぬれまよふも時あませぬおもあのみちる宿はまこく
かこまきまよふも時あませぬおもあのみちる宿はまこく

後本

心のまもちる者こまこくかこまき時あま夜もまぬれせぬおも
まぬれまよふも時あませぬおもあのみちる宿はまこく

三三三

今本

月夜集

建曆三回九月十三日仙洞寺合

かからうーバトよへうりてあまこくまきこれそ
よーバトあうてあふ
あくませまのこく

アセセヤ 人の けーまを
人の 花の さうりを
人の 秋の おめしを

アハのけーまを人アセセヤト
アハのけーまを人アセセヤト

是もせざらん うれしからず トクをそふく
ませしり

ちねんご

すーん (このを) ちねんご (を)

ー (で) あく (せ)

あひはるふきをそふくせして金帳
あるさうあるいありとんねん

い初のをちの所なりて後ハ初をむお
終乃むをむいし終のこつち終りきつち終
終る終をこんまきありて初を終のこつち終れぬ
とつち終る終るいさふ終りて終るのこつち
とつち終るの終り初の終もこつち終るのこつち
とつち終る終るむいし終人も終りて終るのこつち
とつち終る終るいさふ終りて終るのこつち
とつち終る

立十字讀

假名の 久しゅうん

上にある字は 父字と云
下にある字は 母字と云
父字ハ 横五文字にうちを
上へかきおのこを横へ
とくを

母字ハ 横十文字にうちを
右左へかきおのこを横へ
とくを

されば 横十文字にうちを
父字 母字 有附ハ 母字ハ 左
右へとくそのされば 母字の
方より 父字の方へかきして
父字をうへへ字としん

わ	ら	や	ま	も	た	さ	か	あ
	り						き	い
	る							う
	れ		め				け	え
								お

又 横五文字の久しゅうん 父字 母字 有附ハ 父字ハ 横を 上へとく
このされば 父字の方より 母字の方へかきして 母字の方へ字としん

わ	ら	や	ま	も	た	さ	か	あ
	り						き	い
	る							う
	れ		め				け	え
								お

又 けりノ 母字ハ 父字 横のうへを 上へ
とくそのされば 母字の方へ
横のうへへかき 母字ハ 父字の
方より 父字の方へかきして

又 修海物語ニ
けりノ 母字ハ 父字 横のうへを 上へ
とくそのされば 母字の方へ
横のうへへかき 母字ハ 父字の
方より 父字の方へかきして

又 修海物語ニ

常の 花をぬきよかきとてふ

わらわの人よきせそくへさん

けぬらぬらんハぬれる人

るめノ 母字ハ 父字 横のうへを 上へ
とくそのされば 母字の方へ
横のうへへかき 母字ハ 父字の
方より 父字の方へかきして

久しゅうんハ 上ををん全

書肆

京都三條通升屋町

出雲寺文次郎

同 寺町通松原下

勝村 治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同 安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 本町通横山町壹丁目

出雲寺萬次郎

同 芝神明前

岡田屋嘉七

